

「いじろもち」にふれて応える

嶺村法子

日々の生活の中で

保育者として、子どもの心もちにふれた時は
どうれしいことはない。

門に立つ私に、毎朝のようにいま摘んできたばかりの小さな花を差し出してくれる子どもがいる。もう片方の手には、必ず担任のために同じ花を持っていて。一輪ではなく、必ず二輪……。

クラスの中でもひとときわ小柄で幼く見えるこの子

の心もち……。朝の出会いに、花と一緒にそっと受け取る。

保育者として、子どもの心もちに応えられなかった時ほど、切ないことはない。

保護者会のために大勢の保護者が集まったホールの壇上で、大声を上げて走り回る子どもがいる。

「もうすぐお話が始まるから、早くお部屋に戻ってね」声をかける私の手を振りほどいて逃げるこの子

の心もち。いつも朝から遊べるホールが今日は使えないことを、この子はどのように感じているのか、どうして、いま、ここで、こんなにも走らないではいられないのか……。

保護者会を時間通りに始めようとしている私は、いまのこの子の心もちを思いやり、ふれて応えることを忘れていない。こうして振り返ってみれば、大したことではなかったはずである。少し遅れたからといってとがめたてる人がいるわけでもない。

あの時、あの子の心もちにもっと寄り添おうとしていれば……。保育者としての一日は反省に満ちて終わる。

しかしまた、保育者としての一日は、喜びにも満ちている。

保育室で、園庭で、廊下で、私の姿を見ると「きょうとうせんせい！」と呼びかけてくる子がい

る。「はあい」と応えると、すぐにまた「きょうとうせんせい！」と返ってくる。うれしくて、何度でも「はあい」と応える。

こんなふうに、相談事や用事のためではなく、ただ呼びかけるただけに呼ばれることが、どんなにうれしいことか、そしてまた、なんと久しぶりのことかと思う。

まっすぐに私をとらえるまなざしに込められた、いまのこの子の心もち……。私もいまこの瞬間、そ



の心もちに應えることだけに一生懸命になる。

子どもから思いもかけず親しみのこもったまなざしを向けられて、その心もちに気づかされることもある。

けがをして、「念のためにお医者さんに診ていただいた方が……」と言う私に、「痛くない。絶対に行かない」と泣いて訴え続ける子。大事をとって保護者に連絡を試みたが、母親が迎えに来て、言葉を尽くして説得してもガンとして「行かない」と泣いて訴える。

その必死な表情に、いまのこの子の心もちとけがの具合をはかりにかけ、母親の了解を得たうえで、降園まで預かることにする。「わかった。それじゃあ、お母さんには帰っていただいて、幼稚園でお弁当を食べましょう」と。

降園後には、母親の話聞き分け、行きつけのお医者さんで消毒をもらったとのこと。翌朝、

「痛くなかったよ」と誇らしげに報告に来る。

翌日も、その翌日も、私が通りかかると、その子は遊びの手を休め、「あ、きょうとうせんせい！」と手を振ってくる。ちよつとはにかみながら、困難な時を共に闘った同志のようなまなざしで。

「あの日から、何か親しみを感じてくれているみたいで……」と話す私に、「本当に」と、母親も笑顔になる。

済んでしまえば、何ということのない出来事である。だが、あの時のあの子の心もちに大人が精いっぱい応えたからいまがある。

保育者は、常に、いま、この時でなくてはならないことと、後でもよいことの判断を迫られる。いま、どうしてもすべきこと、いま、この子のためにと願うことは何なのか。

計画通り全体の活動を進めることなのか、少し遅

れても、いまのこの子の心もちにいいに伝えることなのか。

子どもの意思や欲求を受け入れることなのか、あるいは状況を伝え、自ら一歩踏み出せるように背中を押すことなのか。

その一瞬の判断に、保育者の心もちがあらわれる。

「心もち」と幼児理解

こうして子どもたちとの一コマ一コマを思い出す時、『育ての心』のフリーズが心の中に去来する。

暑苦しい顔をしてはいなかったか、とげを含んだまなざしを向けていなかったか、いきいきしさを失ってはいなかったか、よろこびの人でいられたか……と。とりわけ、子どもの「心」でもなく、「気持ち」でもなく、「心もち」と言われる時、「ああ、心もち……そう、心もちなんだ……」とストンと落ちるものがある。

「子どもは心もちに生きている。その心もちを汲んでくれる人、その心もちに触れてくれる人だけが、子どもにとって、有り難い人、うれしい人である。」

『育ての心(上)』P 34

「心もち」という響きには、この瞬間にそっとふれて感じて、私自身の「心もち」で精いっぱい応えたいと思わせる何かがある。「いまのこの子の心もち……」そうつぶやいてみるだけで、保育者として、大切にすべきことが見えてくるように思う。

幼児理解が大切であると言われもし、言いもする。

私がこの子をどのように理解したかによって、言葉のかけ方が違ってくる。理解のしかたによって、援助の方向が変わるのである。だからこそ、幼児理解が大切であると。

そのとおりであると、私も思う。子どもを理解す

る目を養い、今、その子にとって必要な援助をできるようにすることが、保育者としての専門性を高めることである。

だが、「心もち」にふれて応えることを抜きに、保育者としての専門性を語ることはできない。子どもの行動を観察し、育ちや課題をとらえ、必要な援助を探ることができたとしても、子どもの心もちにふれ、ていねいに応える中でしか、その子の育ちにつながる援助はできないからである。

このことを、現場を共にする保育者同士でさえ共有し合うことが難しくなっている現実がある。だからこそ、「いまのこの子の心もちは……」と声に出して語り合うことから始めたいと思う。

明日の保育に向けて

いま、保育界では、あまりにも目に見える成果を求められ過ぎてはいないだろうか。

子育て中の保護者を支援すること、保幼小の連携を図り、滑らかな接続に努めること、遊びの中に学びの芽を見出し、思考力や表現力を育てること……。

どれも大切なことに違いない。そうではあるが、どれも日々この子の心もちにふれて応えることの積み重ねの上にこそである。成果を求められ、評価を気にして形を整える保育の中では、子どもの心もちにふれて応えることを忘れがちになる。

そのことを自戒しつつ、日々の取り組みや子どもの育ちについて、現場からの発信に努めたいと思う。

「少なくとも、子どもにとって、心もちの判ってくれない先生の傍に居るほどあじきないことはあるまい。いわんや、心理の理解と、心もちの感触とを混同して、さかしくも、児童の心が判っているというような顔をしている人の傍に於いてをや。」

私たちが目指すのは、子どもを真ん中に置いて、この子の心もちをくみながら語り合う保育である。家庭や地域、園や学校が、それぞれの立場から、よつてたかつて、いまこの子に必要なことは何かと考え、実践することである。

そのためには、現場の保育者には、いまのこの子の心もちにふれて応えることが、どのような変容や成長につながるのかを語る言葉をもつことが求められる。子どもの変容・成長はもちろん、保護者・保育者としての変容・成長について語る言葉が、子どもにかかわる人を勇気づけ、励ます力をもちうるか。そこに、我が国の伝統でもある「子どもの心もちを大切にする保育」の存続がかかっている。

そして、何より大切なことは、先輩から伝えられ、受け継いできた精神を、保育をするという行為によって、後進の保育者に身をもつて伝えていくということである。言葉以前の、醸し出される雰囲気

でしか伝わらないことがある、ということを目覚して保育する時にきている。

新しい年を迎えるにあたって

こうして子どもと保育者の心もちについて考える機会を頂き、いまの私の立場についても思いを巡らせる。教頭という立場で、現場を共にする多様な職種の人々の心もちにふれて応える園運営ができていくだろうか。ベテランゆえの悩み、新任ゆえの心細さ、介助員としての悩みや葛藤、事務や用務を担当しながら子どもにかかわる人の思い……。

いまの私に与えられた職責もまた、これらの人々の心もちにふれて応えることを抜きには語れない。そのことにどれだけ自覚的であっただろうか。

子どもに対するのと同様の心配りと寛容さをもつて、日々の園運営に携わることのできる保育者を目指したい。

(世田谷区立松丘幼稚園)